

# 朝 日 貝 塚 III

— 範囲確認試掘調査概要 (3) —

1997年3月

水見市教育委員会

# 朝 日 貝 塚 III

— 範囲確認試掘調査概要（3） —

1997年3月

氷見市教育委員会

## 序

富山湾に面し、海の幸、山の幸に恵まれた氷見市は、古くより人の生活の場として、数多くの文化遺産を育み、守ってきました。

特に、大正7年に調査された大境洞窟は日本で最初の洞窟遺跡調査として、同じく朝日貝塚は日本海側有数の貝塚として、学史にその名を留め、共に国指定史跡になっております。

このうち朝日貝塚は、大正13年の発掘調査で確認された住居跡の部分が、昭和30年に再掘され、覆屋が建てられ、見学ができるようになり、これまで活用されてきました。

しかしながら遺跡周辺は市街地に近接しており、遺跡の保護・活用をめぐって、新たな検討が迫られるようになりました。

これを受け市教育委員会では、将来に向けて朝日貝塚のよりいっそうの保護・活用を図るため、3か年計画で遺跡範囲確認を目的とした試掘調査を実施することにいたしました。本年度はその最終年度であります。

調査にあたりまして、文化庁・富山県教育委員会・富山県埋蔵文化財センターをはじめ、多くの方々の協力を受けました。とりわけ、父子二代にわたって朝日貝塚を見つめ続けてこられた済晨先生、北陸の縄文時代研究を通して朝日貝塚とも関わりの深い小島俊彰先生には、初年度・昨年度に引き続き、格別のご指導を賜りました。厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

氷見市教育委員会

教育長 江幡 武

## 例　　言

- 1 本書は、平成8年度に実施した、富山県氷見市朝日丘所在の朝日貝塚の範囲確認試掘調査の概要報告である。
- 2 調査は国庫補助事業として、氷見市教育委員会が実施した。
- 3 調査事務局は、氷見市教育委員会生涯学習課に置き、文化係長星敷宗一・主任坂本研資・主事小谷超が調査事務を担当し、課長島勝彦が総括した。また課長代理井波咲朗・主任池田幸代・社会教育主事高野弘文の協力を得た。
- 4 調査は、氷見市教育委員会生涯学習課主任学芸員大野究が担当し、同鈴木瑞麿が協力した。
- 5 本書の編集・執筆は、大野究が担当した。
- 6 調査及び本書の作成にあたって、以下の機関・個人から指導・協力・参加をいただいた。  
記して感謝申し上げる（順不同・敬称略）。  
富山県教育委員会文化課・富山県埋蔵文化財センター・氷見市文化財審議会・凌晨・小島俊彰・伏脇欣二・三矢恵京・閑谷明美・嵩尾朋昭・沢井正雄・浜本清作・沢井とき・沢井さみ・松原秀子・坂口愛子・二崎きみ・東海舞子・田口久仁子・栗一枝・坂田かずい・中村かず子・中村すみ子・宿野隆史・三浦知徳・眞井田宏彰・佐々木亮二
- 7 出土遺物と調査にかかる資料は、氷見市立博物館が保管・管理している。

## 目 次

第1章 調査に至る経緯 .....	1
第2章 遺跡の環境	
第1節 遺跡の地理的環境 .....	2
第2節 遺跡の歴史的環境 .....	2
第3章 平成7年度の調査成果	
第1節 調査の概要 .....	5
第2節 層位と遺構 .....	5
第3節 遺物 .....	5
第4章 平成8年度の調査成果	
第1節 調査の概要 .....	9
第2節 層位と遺構 .....	9
第3節 遺物 .....	9
第5章 まとめ .....	13
報告書抄録	

## 図 目 次

- 第1図 朝日貝塚絵はがき
- 第2図 朝日貝塚と周辺の遺跡
- 第3図 平成7・8年度の調査地区
- 第4図 III・IVトレンチ断面図
- 第5図 遺物実測図（1）
- 第6図 V・VIトレンチ断面図
- 第7図 遺物実測図（2）
- 第8図 遺物実測図（3）
- 第9図 朝日貝塚埋蔵文化財包蔵地の範囲
- 第10図 指定地南端断面図

## 表 目 次

- 第1表 第2図の凡例
- 第2表 朝日貝塚調査研究史年表
- 第3表 出土遺物一覧表

## 図 版

- 図版1 IIIトレンチ遺構面（南から）  
IVトレンチ全景（東から）
- 図版2 Vトレンチ（西から）  
VIトレンチ（西から）
- 図版3 平成7年度出土遺物  
平成8年度出土遺物（1）
- 図版4 平成8年度出土遺物（2）  
平成8年度出土遺物（3）

## 第1章 調査に至る経緯

朝日貝塚は、大正7年に発見され、同11年に史跡に指定された遺跡である。

一般には日本海側の数少ない縄文時代の貝塚のひとつとして周知され、わが国で初めて発掘調査によって住居跡が確認された遺跡、代表的な縄文土器のひとつである「バケット型土器」の出土した遺跡、重要文化財硬玉製大珠の出土した遺跡、あるいは北陸の縄文時代前期の標識遺跡などとして知られている。

地元では、同時に発見された大境洞窟とともに、氷見を代表する遺跡として親しまれ、昭和初期には出土遺物の一部が地元に返還される一方、昭和30年には住居跡に保存倉が建てられて見学ができるようになるなど、遺跡の活用においても先駆的な遺跡として評価できよう。

しかし、遺跡は市街地に近接し、発見以後周囲には徐々に住宅・事業所などが立ち並ぶようになってきた。近い将来、遺跡の保護と開発事業との間で軋轢が生じるのは、必至のことと思われる。

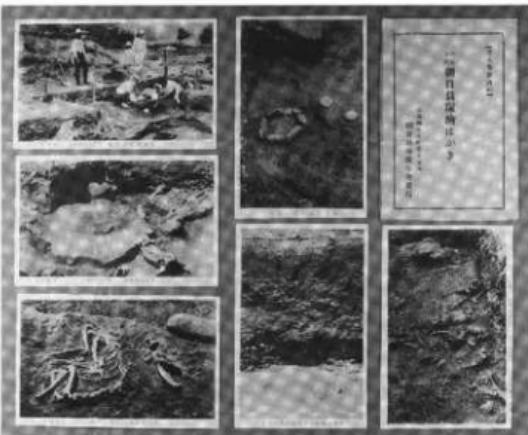
そこで問題となるのは、遺跡の範囲である。

第2表に記したように、指定地の範囲は大正7年と同10年の発掘調査の成果をもとに確定されたが、これは主として貝層の範囲をおさえたものと思われる。

その後済農氏によって指定地はA地点とされ、さらにB地点・C地点・D地点が追加された。また、その後の調査によりA地点の貝層が指定地の南側にも広がることが確認されている。

一方朝日貝塚を縄文時代だけではなく、弥生時代・古墳時代・古代・中世との複合遺跡としてみたとき、その範囲はさらに広がると考えられる。

これらの状況を受けて、氷見市教育委員会は朝日貝塚の範囲を確認するために、平成6年度から3カ年、国庫補助事業として試掘調査を実施することにした。



第1図 朝日貝塚絵はがき  
昭和25年頃  
(朝日貝塚保存会  
発行・6枚組)

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 遺跡の地理的環境

氷見市は、富山県の西北部に位置し、能登半島の基部東側にあたる。昭和27年の市制施行から昭和29年までに、太田村を除く氷見郡1町17村が合併し、現在の氷見市が成立した。面積は約230km<sup>2</sup>、人口は約6万人である。

市域は、北・西・南の三方が標高300~500mの丘陵に取り囲まれ、東側は富山湾に面している。丘陵の大部分は新第三紀層から成り、山間部では地滑りが多い。市北半部は、上庄川・余川川・阿尾川・宇波川・下田川といった小河川とその支流からなる谷地形であり、上庄川流域以外は、まとまつた平野が少ない。市南半部は、かつてラグーンであった平野と、その砂嘴として発達した砂丘からなる。

市街地は、海岸線のほぼ中央に位置し、近年は北と南に広がりつつある。鉄道は氷見と高岡を結ぶJR氷見線が通り、主要道路では高岡市と石川県七尾市を結ぶ一般国道160号と、富山市と石川県羽咋市を結ぶ一般国道415号が通る。

代表的な産業は、稲作を中心とした農業と、ブリ定置網に代表される漁業であるが、近年は第二・三次産業就業者が多く、高岡市などの市外へ通勤する人が多い。

一方、能登半島入口の観光地として、市内には旅館・民宿が立ち並び、近年は温泉も市内各地で噴出している。

朝日貝塚の所在する朝日丘地区は、市街地の南西部にあたる。遺跡西側は市域中央を西から東に向ってのびる朝日山丘陵の東南裾であり、ここから東側の湊川まで緩やかな斜面になっている。標高は丘陵裾で約7m、初年度調査を実施した最下段の水田で約1.2mであり、湊川の水面はほぼ海平面の高さにあたる。

国指定地は誓度寺境内と畠地、周囲は宅地・道路・畠地・水田などとして利用されており、感覚的には「市街地の中の取り残された一角」と言えよう。

### 第2節 遺跡の歴史的環境

朝日貝塚の周囲は市街地であるため、これまで大規模な発掘調査はなく、点的に遺物の出土が知られるのみである。

縄文時代では岩上遺跡があり、前期～後期の資料が出土している。一方十二町潟排水機場跡からは、前期前葉墳の資料が採集されている。また、朝日水源地遺跡では後晩期の資料が出土している。

弥生時代では、岩上遺跡で大型石包丁が採集されているが、詳細は不明である。

古墳時代では、朝日山丘陵に朝日長山古墳・朝日湯山古墳群・朝日谷内横穴がある。このうち6世紀前葉の朝日長山古墳は、前方後円墳と考えられ、県内で数少ない円筒埴輪をめぐらし、武器・馬具・冠帽片などが出土している。また朝日湯山1号墳は、測量調査によって全長約33

mの前方後方墳と考えられている。

古代では、岩上遺跡で須恵器・土師器・瓦塔などが採集されているが、詳細は不明である。また江戸後期の「応響雑記」には著者田中屋権右衛門宅の庭（現在の氷見市民会館のあたり）から須恵器甕が出土した記事がある。

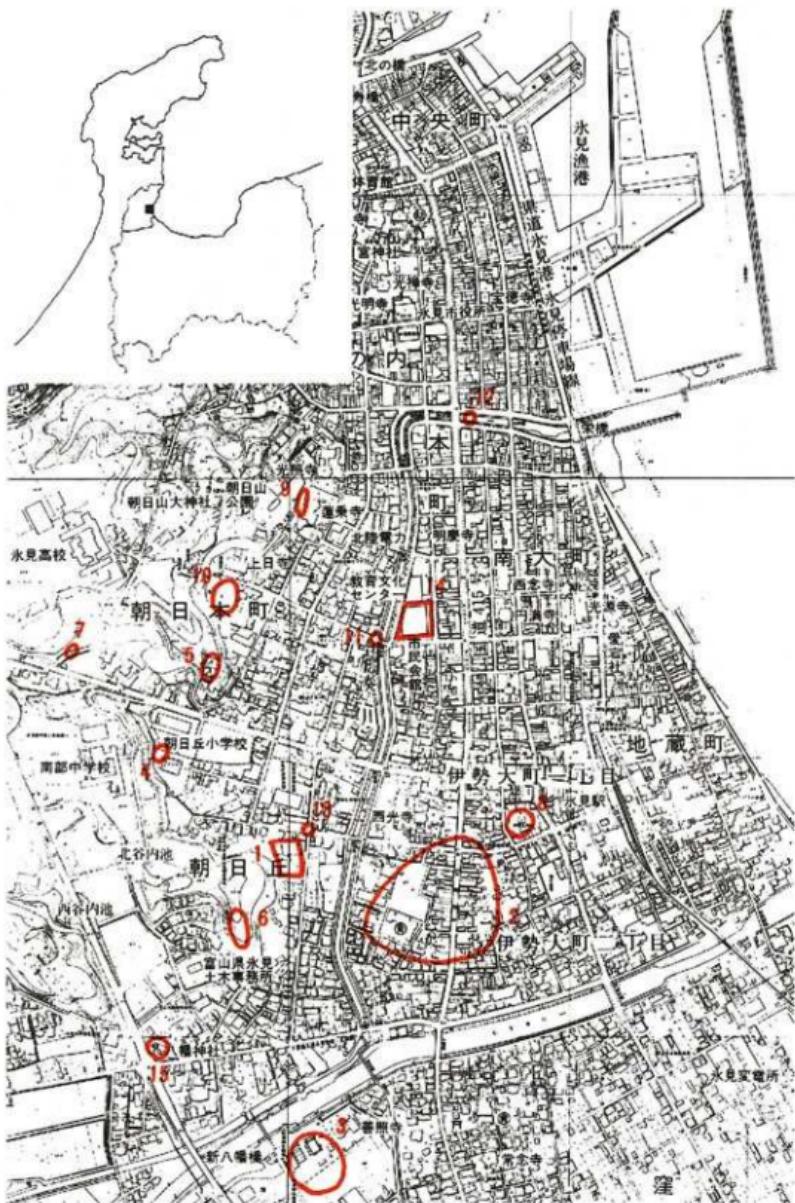
中世では、伊勢玉神社・蓮乗寺・上日寺・朝日橋詰・中の橋近くの川底から石造物や珠洲などが出土している。また朝日十字路遺跡では、珠洲壺に入った唐・宋・明鏡など6488枚が出土している。

このように、市中心部の歴史はまだまだ未解明の部分が多い。それは原始・古代にとどまらず、例えば中世においても文献資料から氷見町は14世紀中頃には成立していたと思われるが、考古資料からはそれを説明するほどの資料の蓄積はまだない。

こうした状況を思い合わせると、大正11年という早い段階で史跡として周知されたことにより、朝日貝塚とその周辺の地域が「取り残された」意義は大きく、地域の歴史を垣間見る窓として一層の保護・活用が望まれよう。

番号	遺跡名など	主な時代	主な出土遺物
1	朝日貝塚(国指定範囲)	縄文～中世	縄文土器・石器など
2	岩上遺跡	縄文・弥生・古代	縄文土器・大型石包丁・瓦塔など
3	十二町潟排水機場遺跡	縄文	縄文土器・石器など
4	朝日水源地遺跡	縄文	縄文土器
5	朝日長山古墳	古墳	鉄刀・杏葉・冠帽片・須恵器など
6	朝日潟山古墳群	古墳	
7	朝日谷内横穴	古墳	
8	伊勢玉神社中世墓	中世	五輪塔・板石塔婆・珠洲など
9	蓮乗寺中世墓	中世	珠洲
10	上日寺中世墓	中世	五輪塔・板石塔婆・珠洲など
11	朝日橋詰遺跡	中世	五輪塔など
12	中の橋敷布地	中世	石仏
13	朝日十字路遺跡	中世	珠洲・古鏡
14	田中屋権右衛門旧宅		
15	雀森		

第1表 第2図の凡例



第2図 明日見塚と周辺の遺跡（1/10,000）

## 第3章 平成7年度の調査成果

### 第1節 調査の概要

朝日貝塚の範囲を知る上で重要なことは、周囲の遺跡との関連であり、7年度は渓川をはさんで東側に所在する岩上遺跡に注目し、2カ所の試掘調査を実施した。

岩上遺跡は、縄文時代から中世にかけての長期間にわたる遺跡として周知されており、昨年度の埋蔵文化財詳細分布調査でも、縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器・越中瀬戸など多数の遺物が採集されている。また昭和50年には、現在の上伊勢保育園の建築工事に先立ち、約100m<sup>2</sup>の発掘調査が実施され、縄文時代前期末から中期にかけての遺物が出土している。

IIIトレンチは、上伊勢保育園の西隣の畠地、IVトレンチは氷見市車庫南側の空地に設定した。調査面積は合わせて約200m<sup>2</sup>である。

### 第2節 層位と遺構

IIIトレンチを設定した区域は畠地であるが、トレンチ設定部分では現在耕作は行われておらず、トレンチ北側付近では表面に明黄色または黒色の砂質土が厚さ15~20cm盛られている。この盛土の下は旧耕作土の褐色砂質土が厚さ50cm前後続き、この層に遺物が含まれていた。また、トレンチ中央部では、両者の間に厚さ約40cmの黒色砂質の埋土があった。

遺物包含層の下は、北側では黄白砂質土、中央部以南では暗灰色砂質土があり、この層に穴・溝と推測する遺構を確認した。遺構覆土は黒色砂質土であり、遺構確認面は標高1m前後である。なお、調査は遺構の確認にとどめ、遺構の発掘は行わなかった。また、トレンチ南側では、遺物包含層途中でやや土質が変化する面があり、この面に穴と推測する遺構を確認したため、この面で発掘を中止した。

IVトレンチは、市役所車庫南側の東西に長い空地の未舗装部分にトレンチを設定したが、トレンチ全体に厚さ55~90cmにわたって何度も盛土が行われており（西端で11回）、発掘はこの除去でかなり手間取った。従って盛土除去後は、トレンチ両端と中央の計4箇所（西側からa・b・c・d各地点）を坪掘りし、遺構・遺物の有無を確認した。

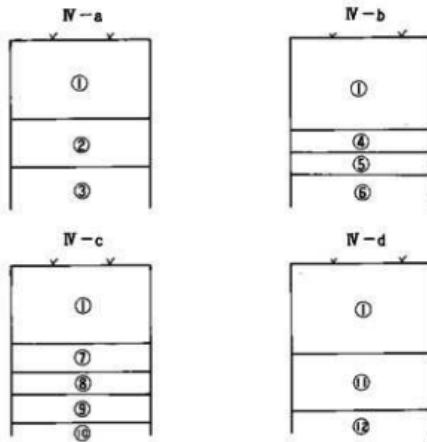
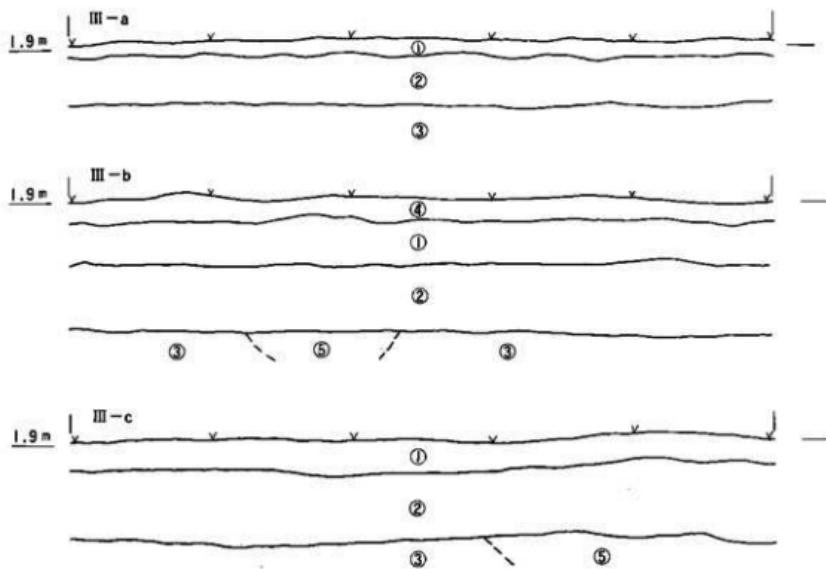
a・b地点は約56cmの盛土の下に旧水田面が約32cm続き、その下は黒色粘質土が50cm以上続く。遺物・遺構は全く確認できなかった。c地点は約92cmの盛土の下に近代の遺物を含む黒色粘土層が約15cm、その下に中世の遺物を含む黒色砂層が約20cm確認され、その下は暗青灰色の砂層が続き、遺構は確認できなかった。d地点は、約65cmの盛土の下に、中世・古代の遺物を含む黒色砂層が約46cm続き、その下は青白色砂層が確認された。この青白色砂層は、IIIトレンチ北側の遺構確認層に続くものと推測する。ただし、こちらの標高は約0.7mであり、IIIトレンチの面と比べて30cmほど低い。

### 第3節 遺物

III・IVトレンチで出土した遺物は第3表のとおりである。ここではこのうち11点を図化した



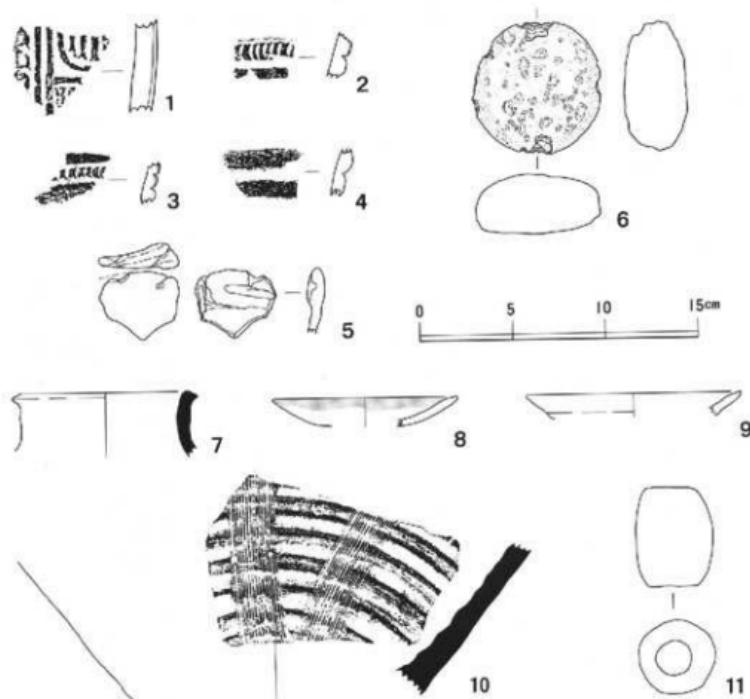
第3図 平成7・8年度の調査地区 (1/400)



- III トレンチ東壁
- ① 黒色砂質土
  - ② 暗褐色砂質土
  - ③ 喀褐色・青白色砂質土
  - ④ 明褐色砂質土
  - ⑤ 黒色砂質土
- IV トレンチ（南壁模式図）
- ① 盛土
  - ② 暗褐色砂質土（近代）
  - ③ 黒色粘質土
  - ④ 暗青灰色砂質土
  - ⑤ 黒色粘質土（砂混り）
  - ⑥ 黒色粘質土
  - ⑦ 喀青灰色砂質土
  - ⑧ 黒色粘質土（近代）
  - ⑨ 黒色砂質土（中世）
  - ⑩ 喀青灰色砂質土
  - ⑪ 黒色砂質土（古代・中世）
  - ⑫ 青白色砂質土

第4図 III・IVトレンチ断面図 (1/40)

(第5図)。1～5は縄文土器の破片である。1は深鉢の胸部で、半截竹管による文様を施す。中期前葉新崎式のものであろう。2～4は、いずれも半截竹管文を施した破片であり、中期中葉のものであろう。5は口縁破片であるが、時期は不明。6は縄文時代の石器であり、重量は181gである。側面4個所に敲打・打欠面があり、敲石あるいは石錐と考える。石材は不明である。7は中世珠洲の壺口縁部であり、口径は9cm。端部を外方に引き出す。白砂粒を含み、堅敏な焼成で、暗青灰色を呈する。8・9は中世土師器小皿である。8は口径10cmの灯明皿であり、9は口径11.4cmである。共に16世紀後半のものか。10は中世珠洲すり鉢の破片であり、底径は約14cmであろう。内面に1単位16条の卸目を施す。白砂粒・海綿骨片を含むが焼成は堅敏で青灰色を呈する。11は土錐で、重量は81gである。なお図化しなかったが、中世の遺物には瀬戸美濃の灰釉皿の破片がある。



第5図 遺物実測図(Ⅰ)(IIIトレンチ1・2・3・4・5・6・7、IVトレンチ8・9・10・11)

## 第4章 平成8年度の調査成果

### 第1節 調査の概要

平成8年度は、史跡指定地北側の調査を行った。すでに指摘しているように、指定地北側には、昭和2年の耕地整理で遺物が出土しており（調査研究史年表参照）、B地点・C地点が設定されている。特にC地点は、いままでのところ朝日貝塚で最も古い縄文前期中葉の資料が確認されており、これらは「朝日C式」として北陸の標識資料になっている。

また、B地点近くの十字路では、昭和51年に水道管工事で珠洲壺1点が発見され、その中に6,488枚の銅鏡がつまっていた（朝日十字路遺跡）。

こうしたことから、指定地北側には縄文時代だけではなく、それ以降の時代も含めて遺跡が広がる可能性が指摘できよう。

ただし、指定地北側は発掘調査の可能な空地がほとんど無く、地権者の了承を得られたC地点西側の水田のみの調査となった。

試掘調査の対象面積は890m<sup>2</sup>であり、発掘面積は42m<sup>2</sup>である。

### 第2節 層位と遺構

調査対象とした水田は、2段に分かれ、西が高く東が低い。標高は西側が約4.5m、東側が約4.2mである。

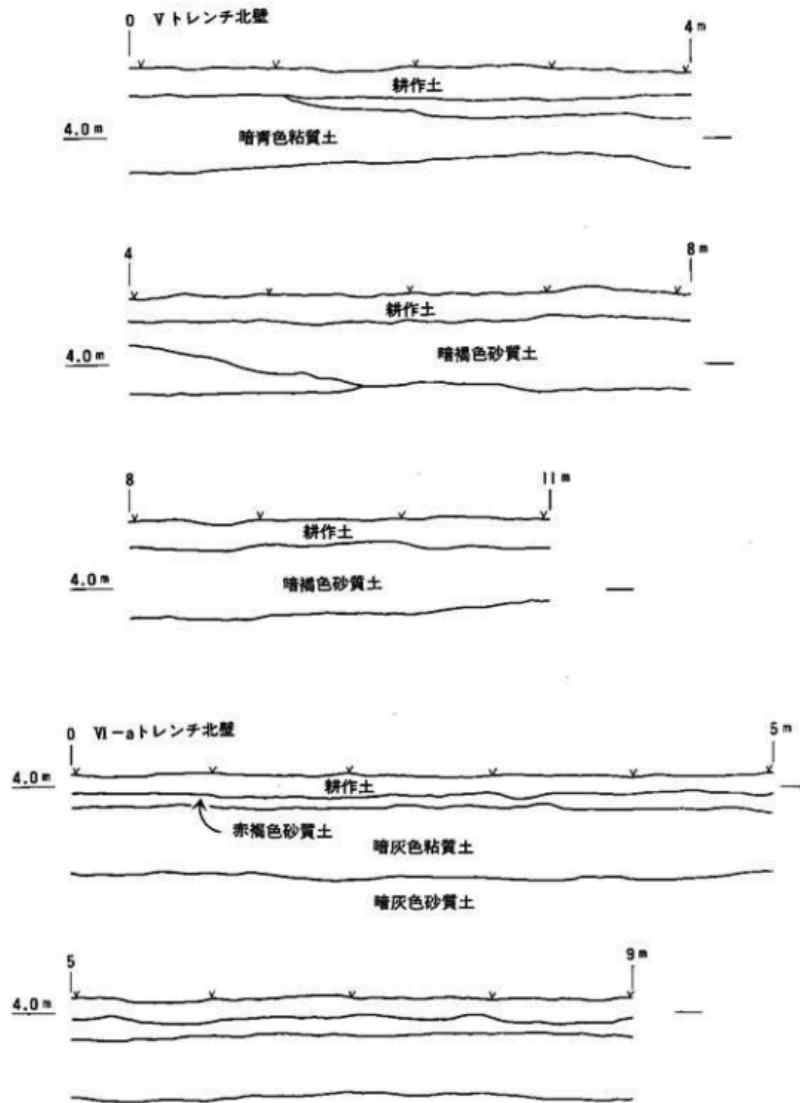
Vトレンチは厚さ約20cmの耕作土の下に暗青色又は暗褐色の粘質土が40～55cm続き、その下は湧水が多く粘質の暗灰砂層となる。遺物が出土したが、遺構は確認できなかった。

VIトレンチは厚さ15cmほどの耕作土の下に厚さ15cmほどの赤褐色砂質土があり、その下は暗灰色粘質土が50cmほど続き、この層から遺物が出土した。この下は暗黄色砂質土であり、この面で穴・溝と推測する遺構を確認した。遺構面の標高は約3.4mであり、遺構の覆土は黒色砂質土である。遺構の発掘は行わなかった。

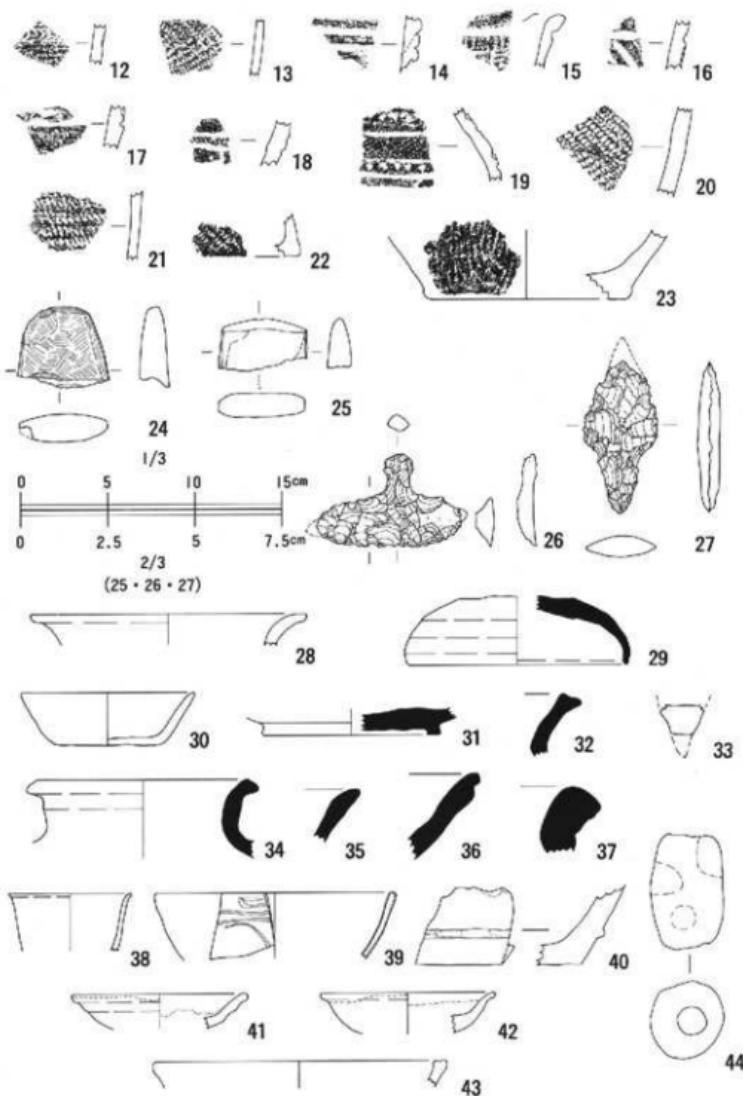
### 第3節 遺物

出土した遺物は第3表のとおりである。このうち33点を国化した（第7・8図）。

12～23は縄文土器の破片である。12は縄文地に連続爪形文を施す北白河下層式のもの。時期は前期中葉か。13は12と同時期と推測する羽状縄文の織維土器である。14は中期中葉の深鉢で半截竹管文を施す。15は中期後葉串田新式の波状口縁で、沈線の下に刺突文を施す。16は中期後葉から後期前葉の深鉢で、二条の横位沈線間に斜位の沈線を施す。17は後期前葉の深鉢で、刺突文と沈線の下にLR縄文を施す。18は後期前葉から中葉の資料で、沈線間に押圧縄文を施したものか。19は晚期後葉下野式の深鉢で、LR縄文の地文に沈線と連続刺突を施す。20は時期不明の深鉢で、羽状縄文を施す。21は時期不明の深鉢。22は時期不明底部破片である。23は時期不明底部破片である。24は磨製石斧で刃部を欠損する。基壠部に敲打痕がある。石材は不明。25は小型磨製石斧で刃部を欠損する。石材は不明。26は石匙である。裏面に調整をあまり



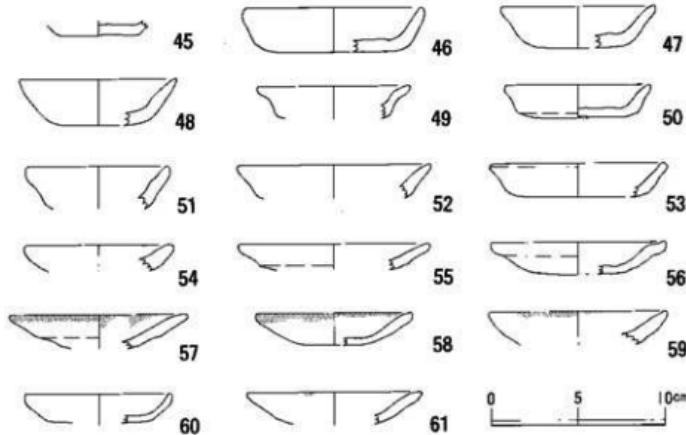
第6図 V・VIトレンチ断面図 (1/40)



第7図 遺物実測図(2)

(Vトレーナー12・38、VI-aトレーナー15・17・21・28・30・34・39・40・41・43、VI-bトレーナー13・18・22・26・27・32・33・35、VI-cトレーナー14・16・19・20・23・24・25・29・31・36・37・42・44)

施さない。石材は不明。27は石鎚か。先端部を欠損する。因の黒い部分は新しい剥離面。石材は安山岩か。28は弥生時代中期の壺の口縁部である。口径は16.0cmである。29は古墳時代の須恵器杯蓋。口径12.6cm、器高3.9cmである。稜ではなく、口縁端部を軽く面取りする。6世紀末から7世紀初めのもの。30は古代土師器杯で口径10.0cm、器高3.0cm。31は古代須恵器杯の底部で高台径10.2cmである。底部外面はナデ調整。32は古代須恵器瓶の口縁部。33は古代の棒状製塙土器の破片であろう。34は珠洲壺の口縁部で、口径は12.0cm。珠洲IV期、14世紀頃のものか。35・36は珠洲鉢の口縁部である。整形・焼成が悪く、重量が軽い。36は口縁部に櫛目波状文を施したものと思われる。珠洲VI～VII期、15世紀後半頃のものか。37は珠洲壺の口縁部である。珠洲VI期、15世紀後半のものか。38は白磁小型碗か。口径7.0cmで、16世紀のものか。39は龍泉窯系の青磁碗で、口径は13.6cmである。口縁に雷文帯、胴部に大きな線描きの蓮弁文を施す。14世紀後半頃のものか。40は瓦器の火鉢又は火桶の底部破片と思われる。外面は灰色、内面は黒色を呈する。41・42は瀬戸灰釉小皿であり、口径は共に10cm。15世紀のもの。43は瀬戸の卸皿で、灰釉を施す。15世紀のもの。44は重量110gの土鍤である。45～61は中世土師器皿である。45はロクロ土師器の底部で、15世紀後半のもの。ロクロ土師器の資料はこの1点のみである。以下は全て手づくね成形のもの。46～48は底部と体部の境が不明瞭な資料で、15世紀初め頃のものであろう。49～54は底部と体部が区別され、外反する口縁が付くタイプで15世紀中頃のものであろう。55～57は肥厚した端部をや面取りするもので、15世紀末～16世紀初め頃のものであろう。57は灯明皿である。58～61は口縁端部を少しつまみ上げるタイプのもので、16世紀中頃のものであろう。60以外は灯明皿である。



第8図 遺物実測図(3) (V-トレンチ56・58、VI-aトレンチ45・48・50・51・52・54・59・60・61、VI-bトレンチ55、VI-cトレンチ46・47・49・53・57)

## 第5章 まとめ

以上をもって、3カ年にわたる試掘調査を、ひとまず終了することになる。

調査は必ずしも万全なものとはいえない、残された課題も多いが、現況で遺跡の範囲を把握する、という当初の目的は達成できたものと考えたい。

これらの試掘調査と平成6年度に当地区で実施した詳細分布調査、さらには大正7年以来の調査研究の成果を総合して、第9図の範囲を、改めて朝日貝塚の埋蔵文化財包蔵地範囲として設定し、今後の保護・活用の基本資料としたい。

以下は各時代ごとの様相を記すことにより、現時点における朝日貝塚の知見を示すものである。なお、以下でいう「遺跡」とは、第9図に示した範囲のことをいう。

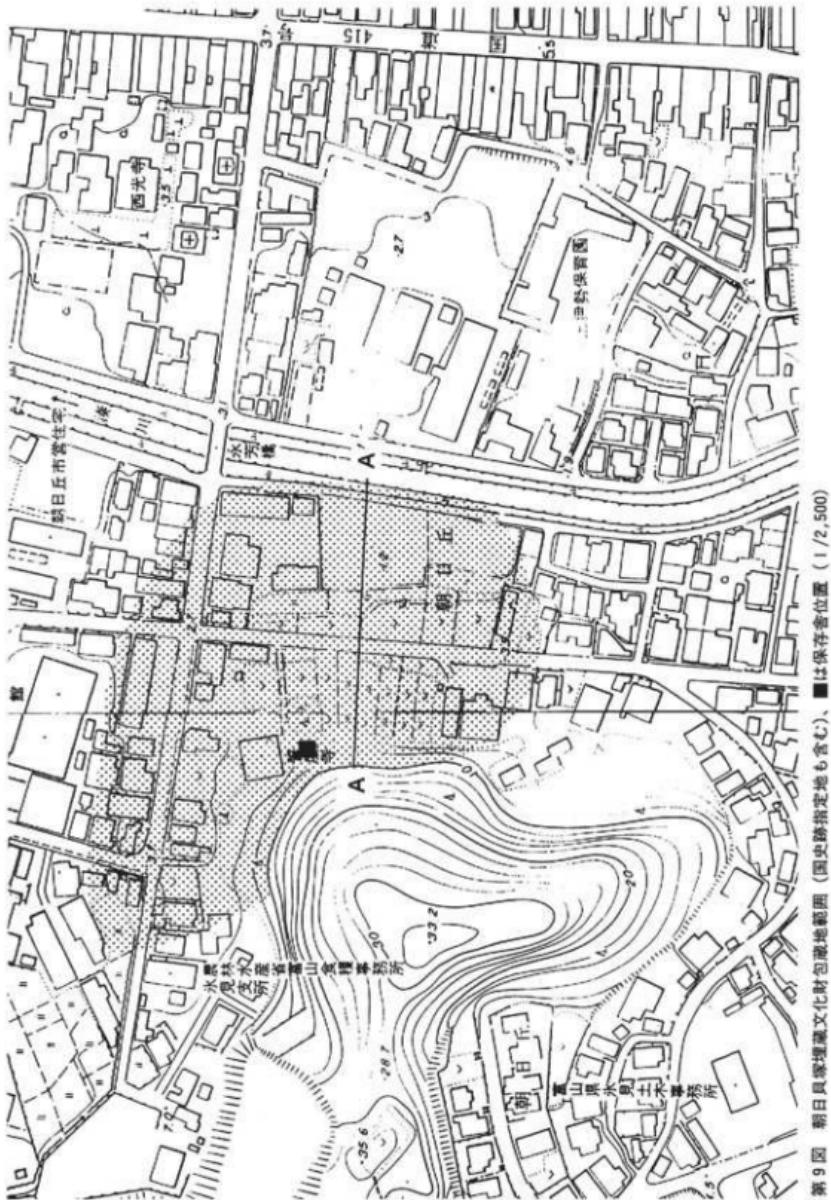
縄文時代：遺跡の北寄りの地点、いわゆるC地点で前期中葉の資料を再確認した。渕畠氏による大正末年の測量図(『朝日貝塚I』18ページ参照)によれば、C地点はおでら川に向けて舌状に張り出した微高地の付け根部分にあたる。遺物量は少ないものの、朝日貝塚における最初の足跡は、このあたりに記されたと推測できよう。しかし、集落を營み、貝塚を形成するのは、前期末頃から中期のことであり、この頃主体は遺跡中央部の丘陵裾に移動している。また貝層の範囲は、これまでの知見どおり、国指定地の範囲にほぼ収まるものと考えたい。後晩期の遺構は不明であるが、土器に加えて土偶・石棒・石冠などが出土していることから、断続的にせよ晩期まで遺跡中央部で集落が營まれた可能性を指摘しておきたい。

弥生時代：遺跡全体で中・後期の資料が確認できる。また、3カ年の試掘調査で出土した破片の大半は、弥生後期から古墳時代にかけての資料である。しかし、遺構未確認のため、弥生時代の遺跡の性格は不明である。

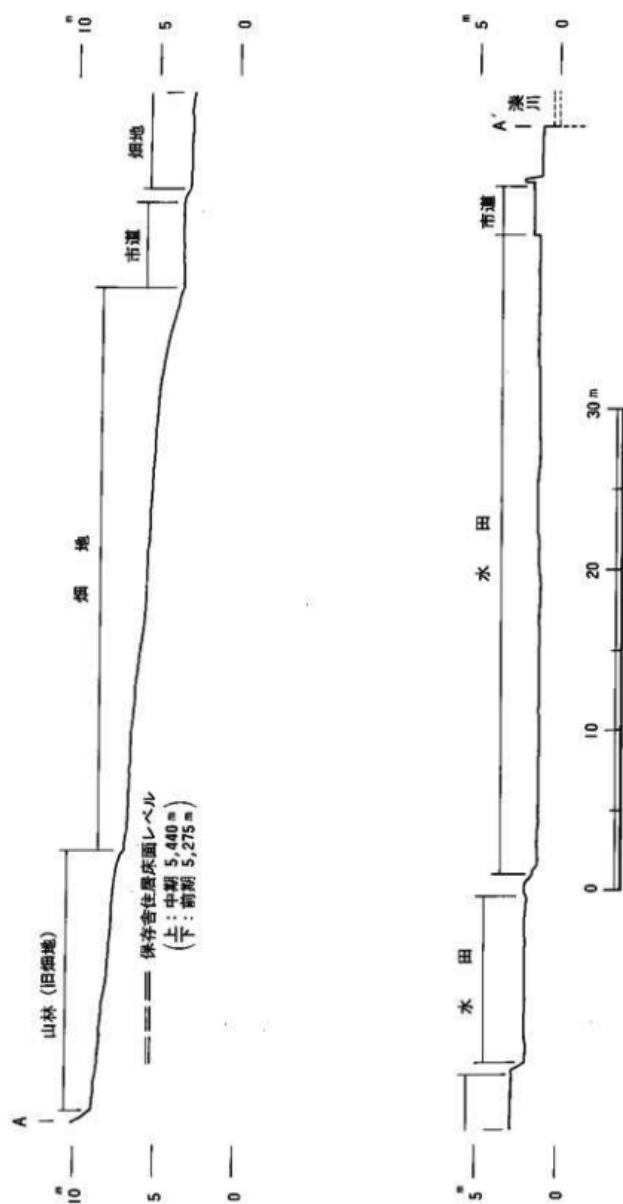
古墳時代：前述のとおり、弥生時代後期から古墳時代の土器破片が多く出土した。また、遺跡全体で古墳時代の須恵器が若干確認されている。遺構未確認のため、この時期の遺跡の性格は不明である。また、遺跡背後の丘陵には前期と推定する朝日潟山1号墳(前方後方墳・全長33m)があり、それとの関連に注目したい。なお、『朝日貝塚I』で埴輪として取り上げた資料は、土師器鉢の可能性もあるため(水見市史編さん委員会考古部会のメンバーから教示を得た)、結論を保留しておく。

古代：遺跡全体で若干の遺物が確認された。飛鳥時代から平安時代のものがあるが、概して奈良時代のものが多い。遺構未確認のため、この時期の遺跡の性格も不明である。

中世：遺跡全体で室町時代の資料が出土した。ただし、北寄りの地区では15世紀の資料が多く、東寄りでは16世紀の資料が多い。遺跡北寄りに含まれる朝日十字路遺跡も、こうした15世紀の動向に取り込めると考えたい。文献では、14世紀中頃には水見湊の成立が確認できる。朝日貝塚は十二町潟と日本海の水運の交点に位置することから、水見湊の一角としてとらえることができるであろう。出土遺物は輸入陶磁器・珠洲・越前・瀬戸美濃・土師器と、近辺の他の



第9図 朝日貝塚埋文化財包藏地範囲（国史跡指定地も含む）、■は保存書位置（1/2,500）



第10図 指定地南側断面図(平成6年5月測量) 東澤川水面の上破線は最高水位、下破線は測量時の水位

第2表 朝日貝塚調査研究史年表

年(西暦)	事項	報告・出典等
大正7(1918)	7月、氷見郡官田村にあった大墓山誓度寺の移転建築のため、同郡氷見町朝日字馬場地内を地壟したところ、貝殻や土器破片が多数出土する	7月25日付「高岡新報」記事
	10月18日～20日、柴田常恵・松村謙が発掘調査(調査位置・面積等不明)し、縄文時代の貝塚と認識される	10月20・21日付「高岡新報」記事
大正10(1921)	6月17日、柴田常恵らによる発掘調査(遺跡中央部の4カ所、約4m <sup>2</sup> )により、貝層の状態、縄文土器の文様の差、長期間にわたる遺跡であること等が認識される	大村正之「石器時代及び古墳時代遺跡」『富山県史跡名勝天然記念物調査会報告』第2号(1921年12月) 5～7月の「高岡新報」各記事(『朝日貝塚』に再掲)
大正11(1922)	3月8日、誓度寺境内を中心に3反2段16步(3,226m <sup>2</sup> )が史跡指定される 3月24日、誓度寺火災で焼失	内務省告示
大正13(1924)	6月8日～21日、柴田常恵・田澤金吾による発掘調査(遺跡中央部約40m <sup>2</sup> )により、炉のある縄文時代住居跡2棟が確認される。また最下層の土器が「朝日式縄文土器」として、他の土器と区別される	大村正之・林喜太郎「朝日貝塚発掘調査報告」『富山県史跡名勝天然記念物調査会報告』第6号(1924年12月)
大正15(1926)	11月7日～9日、岡本規矩男による発掘調査(指定地に南接する畑地12m <sup>2</sup> )により、3体の人骨等が出土する	岡本規矩男・大井敏雄・二井一馬「越中氷見朝日貝塚人骨発掘予報」『人類学雑誌』42-3(1927年3月)
昭和2(1927)	3月5日、指定地北側の耕地整理で、遺物が出土する 3月、大正15年の調査で確認された第2・3号人骨が取り上げられたらしい	林喜太郎「朝日先住民族遺跡」『富山県史跡名勝天然記念物調査会報告』第8号(1927年5月)
	この頃、藤田篤によって、第4号人骨が発掘されたらしい(詳細不明)	凌晨「10代の思い出」『大境』第14号(1922年3月)
	この年朝日貝塚を訪れた高橋健自が、9月18日の日本考古学会例会で、遺跡と遺物の紹介をする	『考古学雑誌』18-10(1928年10月)
昭和6(1931)	3月31日、凌晨による発掘調査(凌川左岸の約4m <sup>2</sup> )により、縄文土器・弥生土器・須恵器等が出土する	大村正之「朝日貝塚東方凌川沿岸の発掘物」『富山県史跡名勝天然記念物調査報告』第12号(1932年5月) 凌晨「朝日貝塚遺跡内の瓦炭地包含層」『大境』第1号(1951年12月) 凌晨「凌川変遷史雑考」『氷見春秋』第2号(1980年11月) 凌晨「10代の思い出」『大境』第14号(1992年3月)
昭和初年頃	大正13年の調査で出土した資料の一部が地元に返送され、氷見中学(現氷見高校)に保管される	小島俊彰「朝日貝塚の朝日下層式土器再見」『大境』第9号(1985年10月)
昭和12(1937)	嶋尾正一が縄文土器の一部を紹介する	嶋尾正一「舞土資料 朝日貝塚の土器紋様」(1937年3月)
昭和13(1938)	金沢医科大学(現金沢大学医学部)に保管されている人骨について、研究の成果が公表される	片山達也「朝日貝塚人上肢骨ノ人種解剖学的研究 第1編 上臂骨ノ研究」『金沢医科大学解剖学教室業績』31(1938年) 中山正秀「朝日貝塚人下肢骨ノ人種解剖学的研究 第1編 大腿骨ノ研究」『金沢医科大学解剖学教室業績』31(1938年)
昭和24(1949)	5月21～22日、富山考古学会の発足を記念して、八幡一郎の指導で発掘調査が行われ(指定地南側の畑地約26m <sup>2</sup> )、人骨等が出土する	富山県史跡名勝天然記念物調査会・富山考古学会「史蹟朝日貝塚第三回発掘調査」(1950年3月) 5月28日付「富山新聞」記事

年(西暦)	事項	報告・出典等
昭和25(1950)	山内清男が、濱畠所蔵の朝日貝塚資料を調査する	淡屋「富山県内新石器時代遺跡概観—山内先生に隨行する記」『大境』第1号(1951年12月)
昭和26(1951)	森秀雄が朝日貝塚C地点とA地点下層の土器を前期に、A地点上層の土器を中期に位置付ける	森秀雄『大昔の富山県』(1951年3月)
	林夫門が自然遺物の目録を紹介する	林夫門「朝日貝塚の自然遺物」『大境』第1号(1951年12月)
昭和27(1952)	8月1日、氷見市市制施行により、遺跡所在地は氷見市朝日となる(昭和43年4月1日から氷見市朝日町)	
昭和30(1955)	9月19~21日、大正13年の調査で発見された住居跡の部分が再掘され、まもなく保存倉庫が建てられる	氷見市文化財保存会『大境洞窟遺跡と朝日貝塚』(1957年)
	山内清男による富山県の縄文土器編年表が発表される	高麗勝喜「先史文化」『能登--自然・文化・社会』九学会連合能登調査委員会(1955年12月)
昭和32(1957)	氷見市文化財保存会が『大境洞窟遺跡と朝日貝塚』を発行	
昭和33(1958)	朝日貝塚保存会が『国指定史蹟朝日貝塚概説』を発行	
昭和39(1964)	氷見高校歴史クラブが、朝日貝塚についてのまとめと後討を行い、朝日下層式と朝日C式が改めて提唱される	氷見高校歴史クラブ「富山県氷見地方考古学遺跡と遺物」(1964年8月)
昭和41(1966)	淡屋が改めて朝日貝塚をA・B・C・Dの4地点としてとらえ、各地点ごとの特徴を示す	淡屋「氷見海岸の人文景観と文化財」『氷見海岸二・上山学术調査書』(1966年1月)
昭和48(1973)	6月6日、硬玉製大珠が重要文化財に指定される	
昭和55(1980)	氷見市教育文化センター建設準備室が設置され、氷見高校保管の朝日貝塚資料が博物館資料として移管される	
昭和57(1982)	氷見市立博物館が開館する	
昭和60(1985)	小島俊彰が朝日下層式土器の再検討を行う	小島俊彰「朝日貝塚の朝日下層式土器再見」『大境』第9号(1985年10月)
	林夫門と津口優司が第1~3号人骨の検討を行う	林夫門・津口優司「富山県朝日・小竹両貝塚出土の人骨時代人骨について」『国立科学博物館専報』第18号(1985年12月)
昭和61(1986)	平口哲夫が朝日貝塚出土のイルカ骨の検討を行う	平口哲夫「富山湾沿岸における縄文時代のイルカ捕獲活動」『大境』第10号(1986年12月)
昭和62(1987)	誓度寺保管の資料が、氷見市立博物館に移管される	
	金子浩昌が氷見市立博物館保管の動物骨の分類結果を報告する	金子浩昌「富山・石川県下遺跡の動物骨」『大境』第11号(1987年12月)
平成6(1994)	氷見市教育委員会が範囲確認調査を、12月2日~翌年3月24日にかけて行う(第1次調査)	氷見市教育委員会『朝日貝塚I』(1995年3月)
平成7(1995)	氷見市教育委員会が範囲確認調査を、12月2日~翌年3月25日にかけて行う(第2次調査)	氷見市教育委員会『朝日貝塚II』(1996年3月)
平成9(1997)	氷見市教育委員会が範囲確認調査を、2月24日~3月14日にかけて行う(第3次調査)	氷見市教育委員会『朝日貝塚III』(1997年3月)

※この年表は『朝日貝塚I』『第3章 朝日貝塚に関する調査・研究の歩み』を基に、加筆・修正して作成した。氷見市文化財保存会は、昭和9年9月に民間有志による任意団体として発足し、市内文化財の調査・研究・保護を目的に、昭和40年頃まで探訪調査や研究書籍の刊行を行った。

※朝日貝塚保存会は、昭和7年から同57年に亡くなるまで誓度寺住職を務めた岩城隆道が中心となった会。活動の詳細は不明であるが、昭和33年の朝日貝塚概説冊子のほか、昭和25年前後に6枚組の朝日貝塚絵葉書(第1回参照)を発行している。岩城は、境内の遺跡に深い関心を抱き、保存倉庫の建設に尽力する一方、雨上がりの日などに境内を見回り、土器や石器の採取に至ったという。なお、誓度寺は岩城の死後、しばらく安養寺住職となり無住の状態が続いたが、平成元年から現山田崇行氏が住職になった。現在、氷見市教育委員会では見学者用の概説パンフレットを作成し、博物館では資料の一部を展示用に誓度寺に貸し出している。

中世遺跡と遜色がない。

以上、朝日貝塚は縄文時代以降のほとんどの時代を網羅する複合遺跡である。

大正7年の発見から79年、史跡指定から75年、戦前・戦後を通して町案内や観光パンフレットなどには必ずといってよいほど、朝日貝塚が掲載されている。史跡がめずらしかった時代から、ブームと呼ばれる昨今まで、文化財に対する認識が大きく変化する中で、朝日貝塚は地域を代表する文化財のひとつとして、静かに受け継がれてきた。

少し古い数字であるが、保存倉の芳名帳によれば、平成4年1月～12月に遺跡を訪れた人は延べ501人である。多くは市内・県内の人たちであるが、中には北は山形県から南は大分県まで、さらには「ブラジル在住」とある、遠方の人が含まれていた。

朝日貝塚は人里離れた山奥ではなく、市民生活のすぐそばに存在する。今後は、学史に占める位置や、昭和30年に地域の人々の努力によって保存倉が建設されたことなどの、遺跡のこれまでの歩みを十分に踏まえた上で、新たな形で、市民共有の財産となりうる史跡を目指して、整備・活用を図らなければ、と考える。

	III	IV	V	VI-a	VI-b	VI-c	合計
縄文土器	105	8	4	12	135	90	354
弥生土器・土師器	470	105	87	380	619	208	1869
古墳時代須恵器	1	1	0	0	1	1	4
古代土師器	0	1	0	2	4	2	9
古代須恵器	23	3	1	3	8	14	52
製埴土器	0	0	0	0	2	0	2
中世土師器	0	4	5	55	74	44	182
瓦器	0	0	0	0	1	1	2
珠洲	27	8	9	30	15	43	132
瀬戸美濃	0	0	2	1	4	5	12
白磁	0	0	1	0	0	0	1
青磁	0	1	1	0	0	4	6
近世陶器	—	—	15	11	27	16	69
土錐	12	1	0	0	2	1	16
石錐	0	0	0	0	1	0	1
石匙	0	0	0	0	0	1	1
磨製石斧	0	0	0	0	0	2	2
たたき石	1	0	0	0	0	0	1
剥片	0	0	0	0	3	4	7
焼石	0	0	0	0	10	8	18
石	0	0	1	0	8	2	11
フイゴ羽口	2	0	0	0	2	0	4
動物遺体	0	0	0	0	1	0	1
合計	641	132	126	494	917	446	2756

第3表 出土遺物一覧表（破片数）

図 版



III トレンチ遺構面（南から）



IV トレンチ全景（東から）  
後方は国指定地



V トレンチ (西から)



VI トレンチ (西から)



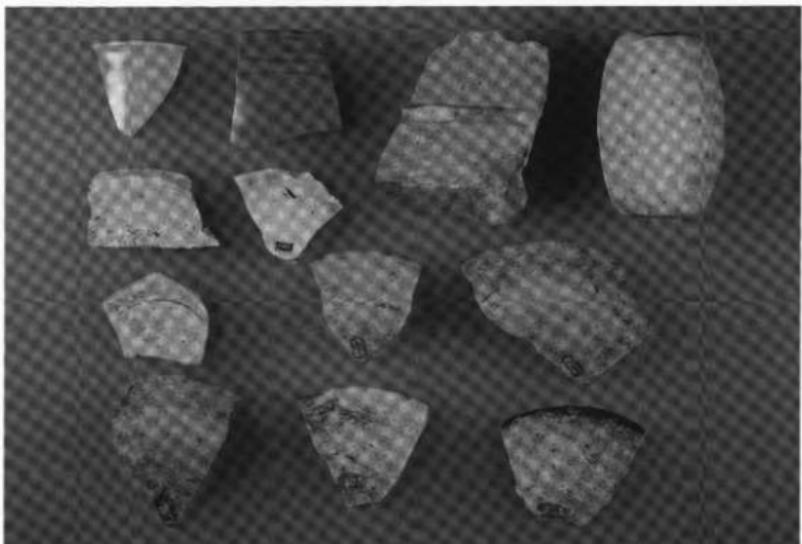
平成 7 年度出土遺物



平成 8 年度出土遺物(I)



平成 8 年度出土遺物(2)



平成 8 年度出土遺物(3)

報告書抄録

ふりがな	あさひかいづか3							
書名	朝日貝塚Ⅲ							
副書名	範囲確認試掘調査概要							
巻次	3							
シリーズ名	氷見市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第24冊							
編著者名	大野究							
編集機関	氷見市教育委員会							
所在地	〒935 富山県氷見市本町4番9号 TEL 0766-74-8215							
発行年月日	1997年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
朝日貝塚	富山県 氷見市 朝日丘	市町村	遺跡番号	36° 50' 40"	136° 59' 15"	19970224 ↓ 19970314	42	範囲確認
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
朝日貝塚	貝塚 集落	縄文・弥生・古墳・古代・中世	溝・穴	縄文土器・弥生土器・古代須恵器・土師器・珠洲・青磁・白磁・石器など				

平成9年3月25日 印刷  
平成9年3月31日 発行

氷見市埋蔵文化財調査報告第24冊

朝日貝塚 III

— 遺跡範囲確認試掘調査 (3) —

編集・発行 氷見市教育委員会  
〒935 富山県氷見市本町4番9号  
☎0766(74)8215  
印 刷 株式会社ひふみ印刷社